

「小江戸」と称される埼玉県川越市に決め、「小京都」と何がどのように違うかを調査することをテーマとした。

# 税務調査 各会派で先進各地へ

翠巒会・岩手県葛巻町  
エネルギー自給の「まちづくり」

創成会・埼玉県川越市  
「小江戸」と呼ばれている蔵づくりと町並み

私たちは翠巒会の政務調査は、岩手県の葛巻町で「エネルギー自給のまちづくり」を目指し、自然エネルギーを生かした発電システムや林業進出・地場産材を活用するバイオマスプロジェクトを学んだ。

川越市は時代を超え、未来へ生きるまち並みを模索し続けている市である。川越は、江戸時代に北辺の要衝として隆盛を極めたとされ、当時の町割りの影響が今も色濃く残る人口三十三万人を越える首都圏の都市である。

城の南北を武家地とする「町割り」や町全体を守る位置に配置された神社、街路の特徴は、丁字路やかぎの手や小路に見られる。また商業地は間口が狭く、奥行き長い敷地割りのため、表はぎつしりと軒を連ねながら、奥に中庭やさらに奥手にオープンス

ペースがある。これは「商業地としてのにぎわい演出と快適な住環境を両立させる知恵が活かされている」といわれている。伝建群の種類や規模は違うが、小京都角館と似ている。

昭和六十三年の観光客は二百四十万人。平成十八年度は五百五十万人と大幅に増加している。観光施策に力を入れる川越市は首都圏という地理的条件から日帰り客九十七パーセントの通過型観光地として人気が高い。一方首都圏から離れている「小京都」は、本来は宿泊型の観光地なのだ

が、通過型観光地になっ

ている。同じ通過型の観光でも川越の具体的な誘致目標数一千万人計画は、仙北市のテンミリオン計画とは質的に違うものに思えてならなかった。

川越の町並みの景観は「蔵づくりの店舗」が中心をなしている。明治二十六年の大火が契機だそうだが、復興に当たった川越の商人は江戸（東京）に多くあった土蔵づくりを耐火建築として取り入れた。

当時首都圏の多くの町では歴史的な町並みが壊されてい

## 資源循環型農業を目指して

基幹産業が酪農業であり、家畜の排泄物も多い。ふん尿と牧場内の生ごみをメタン発酵槽へ投入し、発生したガスで発電、温水も利用できる。発酵槽から出たふん尿を浄化してから液体肥料を抽出するため、固形物の割合の減少と悪臭を抑えることができる。ため周辺に迷惑をかけずに散布できる。

液体肥料も草地に散布するが、ほとんどの病原菌及び種子に対して不活性化させる効果を持っているため植物の抵抗力に効果があるとの説明。

だが、川越では住民全体で「小江戸」と呼ばれる賑わいを見せた面影を「蔵づくりの町並み」に取り組んだのである。川越のまちづくりは理論専攻でなく、「なぜ人が来ない、ものが売れない」の若い人たちの自由討論から始まったそう。



川越市役所にて説明を受ける(11月9日)

## 天と地と人の恵みを活かして

町立中学校の太陽光発電システムを視察。太陽電池パネルで発生した電力を中学校の昼間消費電力に当てるもの。事業費が約四千六百万円で、年間の発電量を購入電力に換算した場合約七十九万円なので維持管理費等の経費を除けば、十年間で採算が取れる。

仙北市では「秋田杉バイオマス発電地域システム化事業調査」をまとめた。

市長は一般質問で、実現化に向けて対策を考えていきたいと答弁している。期待する。

## 木質バイオマスのエネルギーから林業振興へ

木質バイオマスガス化発電所を見学。この施設は森林の間伐材等の木材をチップ化して燃焼の際、発生するガスでガスエンジン発電機を稼働させて電気を供給することはもちろん温水も供給できるシステムである。

木材の燃焼後に残るものは灰だけでなく木炭もできるため農業資材等に利用している。

現段階で生産コストは割高であるが技術的に改良できる部分をクリアしていけばコスト削減は可能との説明。

